

桜蔭俳話会 十一月句会 (第三〇回)

平成二十六年十一月十六日(日)

朝顔の種とる日課猫遊ぶ

幸

【鑑賞】

朝顔の種取に勤しんでいる作者の周りで飼い猫が遊んでいる。ただそれだけの情景である。この句の手柄は種取を「日課」にしていると作者が規定したことである。飼い猫は、作者が日課の種取を早く終えて自分の遊び相手をして欲しいと纏わりついているのかもしれない。

小春日や会盛りあげし古写真

ヤエ子

【鑑賞】

確かに同窓会の座に出された古写真は、会を最高に盛り上げるアイテムである。写真は忘却の淵に沈んだ記憶を引戻し、瞬間的に一同をタイムスリップさせる魔法の杖である。

ただ惜しいのは、「小春日」と「古写真」の対置が、「なごやかさ」という共通点において、少し予定調和的だということである。

小春日やひとりのためのカレー煮る 清子

【鑑賞】

「ひとりのため・・・する」という句立てはよく目にするが、多くの句は孤独、孤愁をモチーフにしている。しかしこの句には、積極的なものを感じている。それは、「カレー煮る」と結句したことである。

前夜のカレーを暖め直しているのではなく、具材や香辛料を工夫して、作者にとって新しいカレー料理に挑戦しているのである。一人暮らしても積極的に生きていくという姿勢を感じ取れる。

一滴の油の綺羅や冬運河

守

【自解】

冬の少し澱んだ運河の水面に油滴が落ち一面に広がっていた。そこに夕日が当たり、漣を受けて綺羅綺羅かがやいていた。油滴が運河に落ちたのはほんの偶然で瑣末なことなのであろうが、美の女神はそれを見逃さず、見るものに感動を与える。

犬の仔の寝つきの早し木守柿

幸

【鑑賞】

「木守柿」と結句しているから庭に犬小屋があるのであろうか。あるいは室内に仔犬がいて作者の視線が戸外の木守柿に及んだのであろうか。いずれにしても「犬の寝つき」に注目したことが良い。

しかし残念なところは、仔犬の寝つきに心を懸ける「子守」と、「木守」柿との避けられない意味の連関性である。「木守柿」以外の季語を配すれば、更に良い句になる。

火事跡の抜けたる空の青さかな

守

【自解】

ある火事跡に遭遇した。建物に遮蔽されていた空間は火事によって消失していた。ぽっかりと抜け出した空は、罹災の悲しみを増すように青く澄んでいた。

幼児らのてんでに散りぬ冬紅葉

秀一

【鑑賞】

水を得た魚のように一目散に広場に散っていく幼児たち。その広場を取り囲むように燦然と輝いている冬紅葉。

一見すると、「散る」が幼児と冬紅葉の双方にかかるような句立てであるが、作者は「散りぬ」と中七でしっかり止めている。

ふる里をこの地と決めむ柿たわわ 才美

【鑑賞】

「柿たわわ」には、作者が抱いたであろう人生の安息感が、感じられる。

大方の人にとって、故郷は自分が生まれた地、幼少期を過ごした地であろうが、このような地は、自分の誕生日に既に決められており、自ら選び取ることはできない。これに対して「終の棲家」は自らの意思で選びとったものである。終の棲家の地を「ふる里」と感じられる作者は幸せである。

柿落葉土に戻すは惜しき紅

友子

【鑑賞】

紅の残る柿落葉に対する作者の愛惜の念を示した

ものである。

確かに土に還すには惜しいほどの紅ではあるが、そうかと言って、「惜しい」と思う作者の感情を直接表現するのは、避けられれば避けた方がよい。

たとえば、「柿落葉その紅土に還しけり」というように、事実のみ述べ、あとは読み手の鑑賞に任せるのである。

冬薔薇リリー・マルレーンの声に逢ふ 才美

【鑑賞】

園内に入ると丹精の薔薇の傍らには育苗家の思いの込められた品種名が付されている。伝説の歌姫の「リリー・マルレーン」の名前が作者の見た名札に実際に付されていたかどうかは知らない。ある薔薇の前に立ったとき、作者の脳裏にはふとこの名と歌声が浮かんだのである。いうならば、視覚の聴覚化である。薔薇はこんなにも人を魅了するのである。

病み始む団塊世代冬に入る

明美

【鑑賞】

世の中を引つ張ってきた団塊世代が病み始めて来ているという大きくくりの把握の仕方は上手い。「冬に入る」との季語との配合も良い。

ただ、この句の弱点は文法上の問題である。文法によれば、団塊世代につながる「病み始む」は、「病み始むる」となるべきである。こうすると上五は六音となる。

この音数との関係で終止形と連体形を意識的に混用した句が散見されるが、このような易き風潮に乗ってはならない。「病み始むる団塊世代冬に入る」と上五を敢えて六音にするか、順序を入れ替えて「立冬や団塊世代病み始む」とすればよい。

砂浜の玻璃の丸みや冬日和

友子

【鑑賞】

荒波にもまれたガラス片の角が取れ、今、砂浜に打ち上げられている。浜を散策すれば日常的に目にするものであり、あまり句の題材にされない。作者の非凡はところは、ガラス片の「丸み」に注目したことである。

人生という荒波に翻弄されながら、何とかそれを乗り切った者だけに通有する安堵感とでも言うべき

ものであろうか。「冬日和」との配合がよい。

啄ばみの跡の残れる柿ばかり ヤエ子

【鑑賞】

柿の取り時は鳥との闘いである。これは冬に向かつて渋が抜けていく渋柿であれば、もぎ取るタイミングは微妙である。ギリギリまで待つて取ろうとした柿には、無念にも嘴の跡が深く残っているだけである。所詮、野にある物は、野にいるものに任せよ、ということ。

風来たりかすかなうねり草紅葉 ヤエ子

【添削】

はるかよりうねりかすかに草紅葉

豊の秋物産展のひとだかり 弘子

【添削】

豊の秋今日はいづこの物産展

パトカーのつぎつぎ来たる夜寒かな 明美

【添削】

パトカーの音のつぎつぎ夜寒かな

奥の部屋基石の音する長き夜 邦子

【添削】

長き夜の基石の音や奥の部屋

食べおさめつぶやく母の栗ごはん 邦子

【添削】

食べおさめつぶやく母の栗ごはん

庭の端丈を競ひし石露咲きぬ ツル子

【添削】

庭の端（は）の丈競ひたる石露の花

抱き起こすこと待てるかに小菊咲く 弘子

【添削】

抱き起こすもの待つかのやうに冬小菊

返信に小春の風を同封す 才美

【添削】

返信に小春の風を入れにけり

今年酒父の笑顔の見えかくれ

ツル子

【添削】

大声を出せば散りそう萩の花

邦子

【添削】

大声のあらば散りなむ萩の花

冬晴の和傘の和紙のばんと張り

明美

【添削】

冬晴や和傘の紙をばんと張り

子どもより親の意気込み七五三

邦子

【添削】

子どもより親の上気や七五三

街騒を隔つ林の草じらみ

弘子

【添削】

街騒を隔つ林や草じらみ

八十二才の声朗々と村芝居

幸

【添削】

八十二の声の朗々村芝居

この空気君へ上げたい秋の尾瀬

ヤエ子

【添削】

この空気君と吸ひたし秋の尾瀬

送られし里の名物次郎柿

清子

【添削】

箱入りの里の名物次郎柿

傘寿なる振り返りしや秋深む

ツル子

【添削】

秋深し傘寿の坂を振り返る

真新し煉瓦造りやつるし柿

弘子

【添削】

新しき煉瓦造りやつるし柿

買ひたての銀色の靴星流る

才美

【添削】

買ひたての銀色の靴星流る

【添削】

星流る銀色の靴履かぬまま

つり橋の溪の深きや谷紅葉

ツル子

【添削】

つり橋のつなぎし溪の冬紅葉

風染めし紅葉の山路盛りかな

邦子

【添削】

風染めし紅葉の山を下りけり

箱根連山富士一望や今朝の冬

友子

【添削】

今朝の冬箱根連山不二の山

短日や干し物忘れられてをり

友子

【添削】

短日や物干し台に人の影

糞屋の蔵の白壁渡り鳥

幸

【添削】

糞屋の壁白かりし渡り鳥

鶉高音優柔不断を叱咤する

ヤエ子

【添削】

鶉高音我の優柔不断かな

落葉まふ張りつばなしの売家札

弘子

【添削】

枯葉まふ張られしままの売家札

夕刊のバイクの音や暮早し

ツル子

【添削】

バイク音夕刊なりし暮早し

台風に庇壊され水強し

眞壽

【添削】

台風に潰えし庇雨激し

喪の葉書受ける北風身に沁みる

清子

【添削】

手のひらの喪中の葉書北風（きた）強し